

フィリピン海スラブ内で発生した1819（文政二）年近江地震

The 1819 disastrous Bunsei Ohmi earthquake that occurred within the Philippine Sea slab beneath central Japan

石橋 克彦 [1]

Katsuhiko Ishibashi [1]

[1] 神戸大・都市安全研究セ

[1] RCUSS, Kobe Univ.

文政二年六月十二日（1819年8月2日）の中部日本のM7超の大地震は、琵琶湖周辺と西濃平野に震度6以上の揺れと大被害を与えた。しかし大被害は局在していない。いっぽう震度5の範囲は、若狭湾岸～名古屋～伊勢山田～兵庫県東部と広く、ほぼ円形である。この震度分布のパターンは、1994年5月に滋賀県中部の深さ44kmのフィリピン海スラブ内で発生したM5.2の正断層型地震のものに似ている。本地震は余震の記録がほとんど無く、合計206点の地震史料中、六月廿二日と廿七日の二個のみである。以上から、本地震は上部地殻内地震ではなく、琵琶湖の下あたりまで沈み込んだフィリピン海プレート内部で発生したスラブ内地震だと判断される。

文政二年六月十二日（1819年8月2日）の未の下刻頃（15時頃）に、近江国（滋賀県）のあたりで大地震が発生し、琵琶湖周辺に大被害を与え、伊勢湾沿岸～京阪奈地域～若狭地方に震度5以上の強い揺れをもたらした。宇佐美（1996）の「新編日本被害地震総覧・増補改訂版」は、震央を136.3度E・35.2度N（彦根の南東方の滋賀県東部）、Mを7と4分の1プラスマイナス4分の1と推定している。石橋（1997；「阪神・淡路大震災の教訓」）は、この地震は琵琶湖東方の下のフィリピン海スラブ内の地震だろうと述べているが、本論文はこのことを論証する。

この地震に関する史料は、武者（編、1943）の「増訂大日本地震史料・第三巻」に35点、東京大学地震研究所（編、1984、1989、1993）の「新収日本地震史料・第四巻、補遺、続補遺」にそれぞれ91点、29点、32点、宇佐美（編、1998）の「日本の歴史地震史料」拾遺」に19点、合計206点が収集・公刊されている。伊藤・他（1986、大阪府大歴史研究、24）は、1984年までの既刊史料を用いて本地震を詳しく調査している。彼らは近江湖東平野中央部に震央を推定し、下田撓曲と呼ばれる活構造の活動を検討したが、活断層と本地震との関係は不明のまま残された。

この地震による被害が著しかったのは、彦根・近江八幡をはじめとする湖東地方、濃尾平野西部の輪中地帯、湖西の高島、湖北のマキノ町などで、場所によって震度6以上に達した。しかし、M7級内陸上部地殻内地震の場合に一般にみられる被害集中地帯はない。いっぽう、震度5の範囲が広く、北は福井県の鯖江・小浜、東は愛知県の犬山・名古屋、南は三重県の伊勢（山田）、西は兵庫県東部の尼崎・篠山付近まで、ほぼ連続的に広がっていたと推定される。この範囲内の京都・大阪・奈良などはもちろん震度5であり、範囲外の兵庫県北部の豊岡・出石や三重県熊野も震度5に近かった。震度5の領域は、内陸上部地殻内大地震で多くみられる長円形（1995年兵庫県南部地震が典型）ではなくて、ほぼ円形とみられ、大被害の領域の割にかなり広い。

この地震の際だった特徴は、伊藤・他（1986）も指摘しているように、余震の記録がほとんどないことである。内陸上部地殻内の大地震は必ず活発な余震活動を伴い、歴史地震でも、史料が豊富であれば余震記事が残る。しかるに、本地震の場合、余震かもしれない記事は、近江八幡の「（六月）廿二日正九ツ時少々地震」と、名古屋の「（六月）廿七日地震少し有」だけである。また、5史料集を通じて、六月十二日の次の中部日本の有感地震として項目が立てられているのは、八月十八日の三河田原のもので、その次は九月十一日の京都のものである。伊勢外宮の権祢宜だった足代弘訓が1854年伊賀上野地震体験後に編纂した「地震雑纂」では、「（文政二年の地震は）此度の如く数日に及ばず、ただ一度而已（のみ）なり」と明記している。京都にも、「今日未半刻斗地震岩働也」（中西家日記）「未剋後大地震一度」（浜島家日記）という記録がある。震動時間が長かったような記録もあるが（そうでない記録もある）、活発な余震活動が続発しなかったことは確実であろう。

1994年5月28日に滋賀県中部（136度17分E・35度19分N）を震央とするM5.2の地震が発生したが、深さが44kmで正断層型の発震機構を示し、余震は3～4個であった（気象庁、1995、予知連会報、53）。この地震は明らかに、琵琶湖付近まで沈み込んだフィリピン海プレートの内部で発生したスラブ内地震である。宇佐美（1996）によるこの地震の震度分布は、彦根・四日市を含む範囲が震度4で、全体のパターンが1819年文政近江地震の震度分布とよく似ている（相似的）。

以上のことを総合すると、1819年文政近江地震は、上部地殻内地震ではなく、琵琶湖の下あたりまで沈み込んだフィリピン海プレート内部で発生したスラブ内地震だと判断される。その震源は、1994年5月28日の滋賀県中部地震の震源に近かったかもしれない。享和二年十月廿三日（1802年11月18日）に名古屋～畿内に被害を生じた地震があったが（宇佐美（1996）によるMは6.5～7.0）、それも同様の地震だと考えられる。

兵庫県南部地震以降とくに、内陸大地震の対策は活断層を中心に考えられているようにみえるが、本地震の

ようなスラブ内大地震にも注意すべきである。この地震が現代に発生すれば、地盤のよくない場所を中心に伊勢湾沿岸～中京圏～琵琶湖周辺～京阪奈圏の広域で被害を生じ、日本列島の東西の交通に支障をきたす恐れもあるだろう。